

# 「日本語は役に立つか？」

にほんご やく た

## ～国際語としての日本語の可能性を探る～

こくさいご

にほんご

かのうせい

さぐ

## を開催して

かいさい

### 日本語国際センター総務課

にほんごこくさい

そうむか

### はじめに

国際交流基金では、設立以来、海外における日本語教育・日本研究の振興を重点事業のひとつと位置づけてきました。その一環として、平成元年（1989年）埼玉県浦和市に日本語国際センターを開設し、海外で日本語を教えている先生方の研修や教材の開発、情報交流ネットワークの整備に携わってきました。平成11年（1999年）日本語国際センターは設立10周年を迎えましたが、これを記念して、12月1日、東京（国際交流フォーラム）において「日本語は役に立つか？ ～国際語としての日本語の可能性を探る～」という国際シンポジウムを開催しました。

### シンポジウムの目的

もくてき

「日本語は役に立つか？」いささか挑戦的なタイトルですが、国際交流基金が1998年に実施した「海外日本語教育機関調査」によると、海外115の国や地域で、210万人に達する人々が日本語を学んでいることが判りました。5年前の1993年調査では、学習者数162万人という結果がでていますので、この5年間で30%も学習者が増えて

### パネルディスカッション参加者

さんかしゃ

#### ●コーディネーター

加藤秀俊 国際交流基金日本語国際センター所長  
かとうひでとし こくさいこうりゅうききん にほんごこくさい しよしょう

#### ●パネリスト

シンチア・ネリ・ザヤス

海洋人類学者 アテネオ・デ・マニラ大学  
（フィリピン）  
かいやうじんるいがくしゃ たいがく

アンナ・プロイノウスキ

映画監督・女優・作家（オーストラリア）  
えいが かんたく じよゆう つか

ピーター・グリーリ

コロンビア大学ドナルド・キーン日本文化センター  
所長（米国）  
たいがく べいにく くにほんぶんか

ビクトル・アントニオ・ドス・サントス

開業医（眼科）（ブラジル）  
かいげうい がんか

ジュリアン・グリエ

日欧産業協力センター欧州事務所代表（ベルギー）  
にちおうさんぎょうきょうりょく とうりゅうじ むしよたいりゆう

イシュトヴァーン・セルダハイ

駐日ハンガリー共和国特命全權大使（ハンガリー）  
ちゅうにち ほんがり こくどうめいぜんけんたいし

イリーナ・マハラセ

ENIグループ副社長（ロシア）  
ふくしやちやう

いる計算になります。しかも、学習者の年齢層や専門分野はますます多様化しており、もはや日本語は、日本という国のなかで日本人だけが使用する言語ではありません。世界中で、さまざまな職業の人々が日本語を使って活躍しています。その意味においては、日本語は「役に立つ」言語であると言っても差し支えないと思われます。

それでは、こうした現象はこれからも拡大していくものなのでしょうか。さらに、国際社会において日本人と外国人とが、あるいは外国人どうしてコミュニケーションを行う手段として日本語がどんどん使われるようになるためには、日本語あるいは日本人のコミュニケーションの方法に何が求められるのでしょうか。こうしたことを考えるのが今回のシンポジウムの目的であり、「国際語としての日本語の可能性を探る」というサブタイトルをつけた次第です。

### 記念講演

きねんこうえん

今回のシンポジウムでは、まずコロンビア大学名誉教授のドナルド・キーン先生に「日本語と私」というタイトルで記念講演を行っていただきました。かつて、日本語を学習する外国人というと、日本の歴史や文学について研究する日本研究者がその大半を占めていました。ドナルド・キーン先生はまさにこの分野を代表される世界的な権威であり、キーン先生が書かれた数々のご著作を通じて、日本の豊かな文学遺産が広く海外に紹介されてきました。今回の講演では、子どもの頃の趣味だった切手収集と同じような感覚で漢字を覚えていったこと、『源氏物語』の英訳本を読んで日本文化の素晴らしさに目覚めたこと、海軍の日本語学校での日本語学習、京都留学時代の思い出、翻訳の難しさ、永井荷風をはじめとする数々の文化人との交流録など、ご自身の60年近くにわたる研究生活をふりかえりながら、日本語学習や翻訳にまつわる興味深いお話をしてくださいました。そして、講演の最後にキーン先生は、「日本文化全体が、中にいろいろいな宝物が入っている宝庫です。日本語はその扉を開ける鍵です。」とまとめられました。（キーン先生の講演の概要は、『日本語教育通信』第36号で紹介しました）

が、全文が国際交流基金のホームページ( <http://www.jpfi.go.jp/j/index.html> ) に掲載されていますのでぜひご覧ください。)

## パネルディスカッション

午後を実施したパネルディスカッションでは、海外7カ国から、日常、日本語を使って仕事をしている7名の方々をパネリストとしてお招きしました。それぞれの専門分野も日本研究者、外交官、人類学者、眼科医、映画監督、実業界、芸術交流のプロモーターなど広範に及びました。

パネリストの日本語学習歴をみると、日本で幼少時代を過ごされた方、日本へ留学して高等教育を受けた方、また日本語の知識がないまま研修で1年間日本に滞在して実地で習得された方など、さまざまです。日本語を学習するうえで難しかったことについて語ったところ、漢字、敬語、同音異義語など、一般に日本語学習者が共通して難しいと感じる点については、やはり皆さん一様に苦労されたようです。また、日本語を縦横に使いこなすレベルに達するには、日本人特有の思考様式やコミュニケーションの方法、とりわけ言葉に現れない非言語コミュニケーションについての理解がなければ、日本人と十分な意思疎通ができないという点で、共通した見解が得られました。あるパネリストが語った「日本語を使えるようになるためには、私たち外国人はほんの少し日本人にならなければなりません。」という言葉が印象的でした。

では、日本語を習得してどのようなメリットがあったのでしょうか。もちろん各々のパネリストが従事している仕事は、その卓越した日本語力に支えられていることから、日本語が現在の彼らを形作ったと言えます。自国と日本との芸術交流に携わっているパネリストから、今の仕事をしているおかげで自分の国の歴史や文化を再認識できたとの発言がありましたが、これは日本語に限らず、外国語学習の大きな副産物のひとつと言えるでしょう。興味深かったのは、日本語を学習したことにより、「聞き上手」「謙虚に振る舞う」など日本的なコミュニケーションの技法が身につく、自国で高い評価を受けたという発言です。このパネリストはフランス人ですが、母語に比べ日本語には感情を表現する言葉が豊富にあるので、日本語のおかげで自然な感情表現が可能になったとも語っていました。「日本人は感情表現が下手である」とか「顔の見えない日本人」といった評価はよく耳にしますが、それとは逆に、日本語は微妙な感情を表現する

のに適した言語であるとの指摘には、新鮮な驚きがありました。

これから先、海外で日本語がもっと使われるようになるにはどうしたらよいのでしょうか。これについても

大方の意見が一致しました。すなわち、人的交流や文化交流を活発にして「日本についてもっと知りたい」「日本人と交流したい」という気持ちを高めること、そして何よりも肝要なのは、日本が「魅力のある国」になることだ、というものです。

一方、敬語や漢字を少なくして日本語を簡略にしたらどうだろうかという問題提起については、必ずしも肯定的な意見は聞かれませんでした。ロシアから来られたパネリストは自国の例を挙げて次のように語ってくれました。「帝政ロシア時代のロシア語には敬語表現がありました。しかし、1917年のロシア革命以降、こうした言い回しのほとんどはなくなってしまいました。革命の意図に反するものとして、厳しく批判されたからです。でも、敬語はロシア語の大事な一部であったのです。言語は文化の一部です。そうすると、私たちは文化の一部をも失ったと言ってもいいのかもしれない。」

## おわりに

冒頭に述べましたように、現在世界中で210万人以上の人が日本語を学習しています。この機会に、我々日本人にも、より分かりやすい日本語、より役に立つ日本語を目指して、自らの言語を見つめ直す姿勢が求められるのではないのでしょうか。また、文化交流や人的交流を盛んにして日本語学習に対するモチベーションを高めることが大切だというご意見をうかがって、国際交流基金の各セクションと連絡を密にしながら事業を進めていくことの重要性を、改めて痛感しました。

日本語を話す外国人がさまざまな分野で活躍することにより、日本の社会や文化がより世界に向けて開かれ、同時に、経済開発や科学技術の移転など、日本語を通して日本が国際社会に貢献できる。これこそが、「国際語としての日本語の可能性」ではないかと考えました。

最後になりましたが、ドナルド・キーン先生、パネリストをお務めくださった方々、そして7時間に及ぶシンポジウムを最後まで熱心にお聞きくださった聴衆の皆様

